

言葉にならない瞬間に寄り添う

小さなゆらぎに耳を澄ませて

渡海 菜央

日本大学医学部附属板橋病院
急性・重症患者看護専門看護師

声にならない思いに気づく――。

私が、臨床で気に懸けるようにしていることだ。

なんとなく引かかったこと。でも、それを言葉にするのはけっこうむずかしい。

忙しい現場では、見逃してしまいそうな瞬間がたくさんある。

けれども、あとからふと立ち止まり、「あれはどういうことだったんだろう」「もっと何かできたのではないか」と思うことがある。

大学院に進んだ時、問いを言葉にすることや研究の意義を語ることに、多くの時間を費やした。

思いや実践を言語化することのむずかしさに触れながら、それでも言葉にしようと努めることで、自分の感覚の輪郭が少しずつ見えてきたように思う。

とくに現象学との出会いは、「感じること」と「意味づけること」は切り離しては語れないのだと気づかせてくれた。

臨床では、確かに何かを感じ取っていて、そのままでは終われない感覚がじわじわと残る。

誰かに話すには整理がついていないけれど、でも、なかったことにはできない。

それが、問いの始まりなのかもしれない。

患者や家族との語りのなかには、わずかに揺れるもの、変わっていくものがある。

それは目には見えず、言葉にもならないけれど、確かにそこに何かがあると感じる。

それは、語られた言葉よりも、その前後の沈黙や、表情の揺らぎのなかに現れることもある。

見ようとしなければ、たぶん見えない。

気づこうとしなければ、そのまま見過ごしてしまう。

その小さな気配に立ち会えること。

それを見逃さずにいられる感覚を、急性・重症患者看護専門看護師として磨いていきたいと思っている。

私は、これまで何かヒントを得るためにICNRを手にとってきたように思う。

うまく言えなくても、まとまっていなくても、誰かの問いが、また別の誰かの気づきにつながっていく。

そのつながりのなかで、自分の看護も少しずつ深まっていると感じている。